

究極の外国語学習者の記録 (1)

— 高野秀行の外国語学習 —

山内博之

1. 問題意識

高野秀行というノンフィクション作家がいる。高野氏のHP（オフィシャルサイト）によると、高野氏のモットーは「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く」であり、ご自身を「辺境・探検・ノンフィクション作家」と位置づけている。

高野氏は1966年生まれで、早稲田大学探検部の出身である。2019年12月1日時点でのご著書は、筆者が調べた限りでは、以下の34冊である。

- 高野秀行（2000）『極楽タイ暮らし「微笑みの国」のとんでもないヒミツ』KKベストセラーズ（ワニ文庫）
- 高野秀行（2001）『極楽アジア気まぐれ旅行』KKベストセラーズ（ワニ文庫）
- 高野秀行（2003）『幻獣ムベンベを追え』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2003）『巨流アマゾンを遡れ』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2003）『ワセダ三畳青春記』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2004）『怪しいシンドバッド』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2005）『異国トーキョー漂流記』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2006）『ミャンマーの柳生一族』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2007）『アヘン王国潜入記』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2007）『怪魚ウモッカ格闘記 インドへの道』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2008）『神に頼って走れ！ 自転車爆走日本南下旅日記』集英社（集英社文庫）
- 高野秀行（2008）『辺境の旅はゾウにかぎる』本の雑誌社

(2)

- 高野秀行 (2009) 『アジア新聞屋台村』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2009) 『西南シルクロードは密林に消える』 講談社 (講談社文庫)
- 高野秀行 (2009) 『世界のシワに夢を見ろ!』 小学館 (小学館文庫)
- 高野秀行 (2009) 『メモリークエスト』 幻冬舎
- 高野秀行他 (2009) 『放っておいても明日は来る—就職しないで生きる9つの方法』 本の雑誌社
- 高野秀行 (2010) 『腰痛探検家』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2010) 『怪獣記』 講談社 (講談社文庫)
- 高野秀行 (2011) 『辺境中毒』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2013) 『アジア未知動物紀行 ベトナム・奄美・アフガニスタン』 講談社 (講談社文庫)
- 高野秀行 (2014) 『世にも奇妙なマラソン大会』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2014) 『イスラム飲酒紀行』 講談社 (講談社文庫)
- 高野秀行 (2015) 『またやぶけの夕焼け』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2015) 『移民の宴 日本に移り住んだ外国人の不思議な食生活』 講談社 (講談社文庫)
- 高野秀行・清水克行 (2015) 『世界の辺境とハードボイルド室町時代』 集英社
インターナショナル
- 高野秀行 (2016) 『未来国家ブータン』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行・角幡唯介 (2016) 『地図のない場所で眠りたい』 講談社 (講談社文庫)
- 高野秀行 (2016) 『謎のアジア納豆 そして帰ってきた〈日本納豆〉』 新潮社
- 高野秀行 (2017) 『謎の独立国家ソマリランド そして海賊国家プントランドと戦国南部ソマリア』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2018) 『恋するソマリア』 集英社 (集英社文庫)
- 高野秀行 (2018) 『間違う力』 KADOKAWA (角川新書)
- 高野秀行・清水克行 (2018) 『辺境の怪書、歴史の驚書、ハードボイルド読書合戦』 集英社インターナショナル
- 高野秀行 (2018) 『辺境メシ ヤバそうだから食べてみた』 文藝春秋

最初に単行本が出版され、後にそれが文庫本となった場合には、最初に出版された単行本は、上記のリストには入れていない。そのため、リスト冒頭の『極楽タイ暮らし「微笑みの国」のとんでもないヒミツ』は、出版年は最も若いですが、デビュー作ではない。デビュー作は、早稲田大学探検部時代に行なったコンゴでの怪獣探しをノンフィクション小説化し、1989年に出版した『幻獣ムベン

べを追い』である。そして、『謎の独立国家ソマリランド そして海賊国家ブントランドと戦国南部ソマリア』では、第35回講談社ノンフィクション賞と第3回梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞し、ノンフィクション作家としての確固たる地位を築いている。

しかし、本稿におけるターゲットは、ノンフィクション作家としての高野秀行ではなく、外国語学習者としての高野秀行である。高野氏は、怪獣探しなどの探検を行なう際には、現地で使用されている言語を事前に学習し、ある程度の運用能力を身につけておくとのことである。また、現地に出向いてから新たに必要になる言語があることがわかった場合には、現地で、その言語の学習を行なうこともあるとのことである。そのようにして、高野氏が学習し、使用した言語は、現時点では次の25言語である。

- (1) アラビア語、アラビア語イラク方言、インドネシア語、英語、オリエント語、カチン語、韓国語、カンボジア語、シャン語、スペイン語、スワヒリ語、ソマリ語、ゾンカ語、タイ語、中国語、トルコ語、ビルマ語、ヒンディー語、フランス語、ブルシャスキー語、ボミタバ語、ポルトガル語、モシ語、リンガラ語、ワ語

高野氏は、なぜこれほど多くの外国語を学習し、その運用能力を身につけることができたのか。怪獣探しという強い動機があったにせよ、これだけ多くの外国語学習歴を積み重ねてきたことは驚異的である。しかも、外国語学習は現在も進行中なので、高野氏が学習・使用する外国語の数は、今後もさらに増えていくことだろう。

本稿の目的は、高野氏の外国語学習を記録し、分析することである。まず、第2章では、高野氏の外国語学習の方法について述べる。そして、第3章では、その言語を学習した方法と、その外国語の習熟のレベルとによって、高野氏が学習してきた外国語を6種類に分類する。第4章では、第3章での分類に、学習した外国語の順序という要素を加えた分析を行なう。第5章では、外国語学習の際に使用した媒介語に関する分析を行なう。

なお、本稿を執筆する際に使用した資料は、先に挙げた高野氏のご著書である。高野氏のご著書の中には、外国語の学習と使用について書かれている部分があるので、まずは、それらの記述から、記録・分析に必要な事柄を抜き出してまとめていった。また、高野氏ご本人にお会いして聞き取りを行ない、さらに、メールで質問させていただいたりもした。

(4)

2. 外国語学習の方法

高野氏の外国語学習は、概ね、次の手順で行なわれている。

- (2) ①明確な目的に裏打ちされた外国語使用の動機 → ②特定の個人であるネイティブに師事 → ③目標言語の分析と録音による教材作成 → ④反復練習 → ⑤現場での使用

まず、「①明確な目的に裏打ちされた外国語使用の動機」についてであるが、高野氏の外国語学習には、その出発点として、基本的にいつも「明確な目的に裏打ちされた外国語使用の動機」がある。「明確な目的」とは、たとえば「コンゴ人民共和国のテレ湖にムベンベという怪獣が棲息しているか否かを調べる」というようなものである。ムベンベが棲息しているであろうテレ湖は、もちろん街中にあるわけではなく、ジャングルの奥地にある。そのため、テレ湖までたどり着いて怪獣を探すためには、コンゴの公用語であるフランス語の他に、現地の共通語であるリンガラ語の使用が必要になる。これが、「明確な目的に裏打ちされた外国語使用の動機」である。

そして、次のステップは「②特定の個人であるネイティブに師事」である。高野氏は、たとえば、フランス語については、電車でたまたま隣に座った見知らぬフランス人女性に個人教授を有償でお願いし、その後、定期的にその人のレッスンを受けている。また、リンガラ語については、在日のコンゴ人を探したが見つからず、たまたま出会ったザイル人に有償でグループレッスンの講師になってもらい、その後、定期的にレッスンを受けている。

ポイントは、単に「ネイティブ」であるだけではなく、「特定の個人」でなければならないという点である。会って話をするたびに相手のことがよくわかり、だんだん親密になっていたり、逆に気が合わないことがわかったりするものが、「特定の個人」との付き合いである。一対一で普通に付き合っている友人がいて、その友人がたまたま日本語以外の言語のネイティブであり、その人にお金を払ってその言語を教えてもらっている、と考えるとわかりやすいかもしれない。外国語教育においては、しばしばネイティブ教師の重要性が指摘される。また、ネイティブ講師をそろえ、レッスンは必ずネイティブ教師によって行なわれる英会話学校もある。しかし、高野氏の講師選択の考え方は、それらとは一線を画しているように感じられる。

その次の「③目標言語の分析と録音による教材作成」というステップの内容

は、②の講師選択の考え方と密接に関係している。先に述べたフランス語とリンガラ語の講師の選び方を見れば、選ばれた講師たちが、いわゆるプロの語学教師でないことは明らかである。高野氏が学んだ外国語を(1)に挙げたが、(1)に挙げた外国語の講師となったネイティブたち、つまり、高野氏が「特定の個人」として出会ったリンガラ語、ソマリ語、カチン語、ワ語などのネイティブたちがたまたまその言語のプロの教師であるということは、まずあり得ない。高野氏は、語学教師ではない人たちから外国語を学ぶことを前提にしているということである。

筆者の専門は日本語教育であるので、日本語教師について言えば、プロの日本語教師たちは日本語の初級シラバスを熟知しており、初学者に対して何からどのように教えればいいのかということがわかっている。また、たとえば、「きる(着る)」の否定形が「きない」であるのに、なぜ、同じ音連続である「きる(切る)」の否定形が「きない」にならず「きらない」になるのか、ということなども説明できる。それに、そもそも、プロの日本語教師たちには、学習者に対して熱心に教えようという熱意と意欲がある。

しかし、高野氏が選んだ“教師”たちは素人なので、「リンガラ語の語順はどうなっているのか」「リンガラ語に母音はいくつあるのか」「主語の人称によって動詞は形を変えるのか否か」などと質問しても、的確な答えが返ってくることはまずない。さらに、高野氏によれば、教える意欲がない教師も多く、まずは教師たちを教える気にさせることが大変だ、とのことである。教師たちの教える意欲をかきたてつつ、例文をいくつも作ってもらって、その言語がどのような言語であるのかを分析し、さらに、必要な例文を発話してもらってスマホのボイスメモ(もしくはテープレコーダー)に録音し、それを教材にするとのことである。教える気のない教師を教える気にさせることも大変だろうが、どのような言語であるのかを突きとめるためには、言語研究の感覚が必要であり、そう簡単なことではない。さらに、必要な例文を順次録音していってもらうためには、シラバス作成能力のようなものも必要になる。この「③目標言語の分析と録音による教材作成」というステップは、ごく一般的な外国語学習者には、なかなか真似のしにくいところであろう。

その次のステップは「④反復練習」である。ボイスメモに録音された例文を聞いて反復練習を行なう。これは、いわゆるオーディオリンガ的な学習法であり、外国語教育の世界では、学習者たちのやる気をそぎ、かつ、あまり効果的ではないものとして批判されることも多い。そこで、高野氏に「反復練習が嫌になったりはしないのか」と尋ねてみたところ、「まったくない」とのお答

(6)

えだったので、その理由をさらにお伺いしたところ、「現地で必ず使用する文だということがわかっているので、嫌になることはまったくない」とのことであった。教材の例文に対する、このような絶対的な信頼感は、普通はなかなか得ることができない。これは、「①明確な目的に裏打ちされた言語使用の動機」と密接に関係しているものと思われる。言語使用の目的が明確で、言語使用の現場をリアルに思い描くことができるからこそ、絶対に使用すると確信できる例文のみを集めることができるのであろう。

最後の「⑤現場での使用」は、学習の場からは離れて、実際の言語使用の場に入っていくステップである。つまり、それまでに身につけた外国語能力を駆使して怪獣を探したり、目的とする謎を解き明かしたりするステップなのであるが、実は、このステップにおいても、高野氏の外国語能力は再生産されている。実際の言語使用によって言語能力がさらに高まっていくという側面については、稿を改めて論じることにする。

3. 学習法と習熟レベル

この章では、それぞれの外国語を学習した際の方法の詳細と、その外国語の習熟レベルとによって、高野氏がこれまでに学習・使用した外国語を6種類に分類する。具体的な分類方法については、高野氏ご自身が考案し、それをメール（2018年11月8日付け）で教えてくださいましたので、ここでは、それをそのままの形で使用させていただく。なお、(1)に挙げた25の言語のうち、アラビア語イラク方言については、高野氏が現在それを使用して調査中であるので、この分類及び、今後の分析の対象からは外すことにする。また、モシ語については、メールをいただいた時点では、まだ学習を開始していなかったのだが、その後、学習を開始し、結果が出たので、後から分類に加えていただいた。

- (3) I 先生について学習したことがある。今でもある程度話せる。
：英語、スペイン語、ソマリ語、タイ語、中国語、ビルマ語、フランス語
- II 先生について学習したことがある。一時期はある程度話すことができた。
：アラビア語、オリヤー語、シャン語、ゾンカ語、ヒンディー語、ポルトガル語、リンガラ語、ワ語
- III 現地で何となく習い、何となく片言を話していた。

：カチン語、ボミタバ語、モシ語

Ⅳ 独学で勉強したことがある。一時期はある程度話すことができた。

：インドネシア語、スワヒリ語、トルコ語

Ⅴ 独学で読み書きを勉強したが会話までたどりつかなかった。

：韓国語、カンボジア語

Ⅵ 現地で意識的に学んで、片言が話せる程度になった。

：ブルシャスキー語

上記のⅠからⅥまでの分類基準のうち、ⅠとⅡは「先生について学習した」点が共通しているが、Ⅰは現在でもその能力が残存しているという意味で、Ⅱよりも習熟のレベルが高い。Ⅲも、誰かから言語を習っているのではあるが、事前に日本でレッスンを受けたわけではなく、現地に行ってから、兵士（カチン語）、ガイド（ボミタバ語）、ドライバー（モシ語）から学んだとのことである。そのため、教師対生徒という関係がⅠⅡよりも希薄である。ⅣとⅤは、どちらも独学なので、教師対生徒という関係はない。そして、ⅣとⅤを比べると、Ⅳの方が習熟のレベルが高い。Ⅵに分類されているのはブルシャスキー語のみであるが、高野氏によると、ブルシャスキー語を学習した動機は「能格言語を学んでみたかった」とのことであり、探検や怪獣探しとはまったく異なる動機であったことがわかる。

第2章の(2)で示した学習の手順を、高野氏の外国語学習のプロトタイプとするなら、Ⅰが最もプロトタイプの的で、Ⅱ以降は少しずつプロトタイプから離れ、Ⅵが最もプロトタイプから離れていると考えられるのではないだろうか。

4. 学習法・習熟レベルと学習順序

前章では、学習法と習熟レベルによる分類を行なったが、この章では、その分類に、外国語の学習順序という要素を加味して分析を行なう。

高野氏が学んだ外国語を(1)に列挙したが、それらを、高野氏が学習した順に並べ直すと、次の(4)のようになる。

- (4) 英語、フランス語、リンガラ語、ボミタバ語、スペイン語、ポルトガル語、スワヒリ語、タイ語、ビルマ語、中国語、シャン語、ワ語、インドネシア語、アラビア語、カンボジア語、カチン語、オリヤー語、ヒンディー語、ソマリ語、ゾンカ語、韓国語、ブルシャスキー語、アラビア語イラク方言、ト

(8)

ルコ語、モシ語

上記の(4)では、学習した言語を古い順に並べてある。つまり、最初に学習したのが英語であり、最も新しく学習したのがモシ語だということである。

(4)で示した順序と、前章での6分類をクロスさせて作った表が、次の表1である。

表1 学習法・習熟レベルと学習順序

順序	I	II	III	IV	V	VI
1	英語					
2	フランス語					
3		リンガラ語				
4			ボミタバ語			
5	スペイン語					
6		ポルトガル語				
7				スワヒリ語		
8	タイ語					
9	ビルマ語					
10	中国語					
11		シャン語				
12		ワ語				
13				インドネシア語		
14		アラビア語				
15					カンボジア語	
16			カチン語			
17		オリヤー語				
18		ヒンディー語				
19	ソマリ語					
20		ゾンカ語				
21					韓国語	
22						ブルシャスキー語
23				トルコ語		
24			モシ語			

この表を上から見ていくと、最初に学んだのが英語で、英語は「学習法・習熟レベル」ではIに分類されていることがわかる。2番目に学んだのはフランス語で、フランス語の分類もIである。3番目はリンガラ語で分類はII、4番目はボミタバ語で分類はIIIである。IVの分類が初めて出現するのが、7番目のスワヒリ語である。そして、Vの分類が最初に出現するのが15番目のカンボジア語、VIの分類が最初に出現するのが22番目のブルシャスキー語である。つまり、IからVIの分類別で言えば、最も早く出現するのがIで、次がII、そ

して、ⅢからⅥへと順に出現していく。

ここから言えることは、高野氏の学習方法が、プロトタイプから少しずつ拡散していているということである。高野氏の初期の学習法は、第2章の(2)で示した学習法そのままのⅠもしくはⅡであるが、学習経験・使用経験を重ねるうちに、(2)のプロトタイプから拡散し、19番目のソマリ語以降では、ⅠからⅥまでのすべての分類が見られるようになっている。

また、何よりも興味深いことは、これだけ多くの外国語を学んできた高野氏であるが、その学び方には、何らかのルールや原則があるということである。

5. 学習に使用した媒介語

この章では、高野氏が教師を雇って学習した際に使用した媒介語の分析を行なう。教師を雇ったということは独学ではないということの意味するので、前章の表1で言えば、ⅣとⅤに分類される言語は除かれることになる。表1のⅣとⅤに分類されているのは、スワヒリ語、インドネシア語、カンボジア語、韓国語、トルコ語である。高野氏にお聞きしたところ、これらのうち、インドネシア語、カンボジア語、トルコ語については、独学にプラスして多少のプライベートレッスンがあったとのことである。しかし、とりあえず、ここでの分析では、表1のⅣとⅤに分類されている5つの言語は除いて考えることにする。

また、英語はやや特殊であると思われる。英語はⅠに分類されているが、その能力形成の中心は、中学、高校、大学での教育であり、第2章で示した(2)の方法によるものではないであろう。そのため、英語についても、学習のための媒介語は考えないことにする。よって、ここでの分析の対象となる言語は、表1の24言語から、ⅣとⅤに分類された5言語と英語を除いた18の言語になる。

次の(5)は、これら18言語を学習した際の媒介語を示したものである。矢印の左側には目標言語、右側には媒介語が書かれている。つまり「目標言語←媒介語」という書き方になっている。

- (5) フランス語 ← 英語
- リングアラ語 ← 英語
- ボミタバ語 ← フランス語
- スペイン語 ← 英語
- ポルトガル語 ← 日本語

(10)

タイ語 ← 英語
ビルマ語 ← タイ語
中国語 ← 日本語
シャン語 ← 英語、タイ語、中国語
ワ語 ← タイ語、中国語
アラビア語 ← 日本語、英語
カチン語 ← 英語、ビルマ語
オリヤー語 ← 英語
ヒンディー語 ← 日本語
ソマリ語 ← 英語、日本語
ゾンカ語 ← 英語
ブルシャスキー語 ← 英語
モシ語 ← フランス語

媒介語というのは、目標言語を学ぶ際に使用する言語のことである。だから、媒介語の運用能力は、目標言語の運用能力より高いはずであり、普通は、それまでに習得していた言語を、ある未知の言語を学習する際の媒介語にする。たとえば、(5)を見ると、フランス語学習の媒介語が英語であることがわかるが、なぜ英語が媒介語になっているのかと言うと、その時点で、すでに英語が使用できる言語になっていたからである。

(5) は、目標言語と媒介語の関係を「目標言語←媒介語」という形で示したもののだが、媒介語は目標言語を学ぶ際の使用言語であり、かつ、目標言語より先に習得していたものであるので、(5)の「目標言語←媒介語」という書き方を「使用言語→目標言語」という書き方に変え、次の(6)に示す。要は、(5)の矢印の向きを変え、右と左の言語名を入れ替えるということである。

(6) 英語 → フランス語
英語 → リンガラ語
フランス語 → ボミタバ語
英語 → スペイン語
日本語 → ポルトガル語
英語 → タイ語
ビルマ語 → タイ語
日本語 → 中国語

(12)

- ②ソマリ語
- ②ゾンカ語
- ②ブルシャスキー語

- (8) ①日本語 → ①ポルトガル語
→ ①中国語 → ②シャン語
→ ②ワ語
→ ①アラビア語
→ ①ヒンディー語
→ ①ソマリ語

まず、(7) を見ていただきたい。英語を使用言語として学習した言語は、フランス語、リンガラ語、スペイン語、タイ語、シャン語、アラビア語、カチン語、オリヤー語、ソマリ語、ゾンカ語、ブルシャスキー語の11言語である。(7)の1行目を見ると、フランス語は、最初は目標言語だったのだが、次の段階ではボミタバ語学習の際の使用言語になっていることがわかる。また、モシ語学習の際の使用言語にもなっている。英語は最初に学んだ外国語であるので言語名の前に①と付し、フランス語は①の外国語を使用して学んだ外国語であるので②と付し、ボミタバ語とモシ語は②の外国語を使用して学んだ外国語であるので③と付した。(6)と(7)の他の言語についても同様に①から④までの数字を付した。なお、日本語は外国語ではないので①とした。

このようにして付した数字を見ていくと、(7)の5行目はなかなか興味深い。(7)の5行目を見ると、英語を使用言語としてタイ語が学習され、その習得後にはタイ語が使用言語となって、ビルマ語が学習され、さらに、その習得後にはビルマ語が使用言語になってカチン語が学習されていることがわかる。高野氏の母語である日本語から出発し、「①日本語→①英語→②タイ語→③ビルマ語→④カチン語」というように3つの言語を経て、ようやくカチン語に到着しているのである。

ここでの分析から見える高野氏の外国語学習の特徴は、「目標言語から使用言語への変化」である。中学や高校での英語学習を除いたとしても、日本国内にはものすごく多くの外国語学習者がいる。しかし、「目標言語から使用言語への変化」を経験したことのない人が、ほとんどではないかと思う。

ちなみに、筆者の外国語学習を同様の図式で示すと、概ね以下ようになる。

- (9) ①日本語 → ①英語
①スペイン語
①韓国語

目標言語は一度も使用言語に変化していない。高野市の(7)(8)と比べると、いかに貧弱かということがよくわかる。

6. おわりに

本稿では、ノンフィクション作家である高野秀行氏の外国語学習者としての側面に焦点を当てて、その実態を記録し、分析を行なった。

第1章の(1)に、高野氏が学習し、使用した25の外国語を列記したが、この25言語のリストを見ると、「高野秀行は語学の天才である」と言いたくなる。しかし、分析を進めていくと、高野氏の外国語学習には一定のルールや原則があり、それに忠実に則っていることも窺うことができる。

本稿では、高野氏の外国語学習に焦点を当てたが、次稿では、外国語使用に焦点を当てる予定である。本稿の分析結果からだけでも、外国語教育や外国語学習への示唆はいくつもあるが、それらは、外国語使用に関する分析が終了した後、まとめて述べたいと思う。

(やまうち ひろゆき・実践女子大学教授)